

青陵

第 161 号

二〇二〇年九月二五日発行

発行者 奈良県立

橿原考古学研究所

編集者 水野敏典

平城宮から大峯山は見えるか(下)

ト 部 行 弘

三、地図ソフトカシミールによる検討
それでは平城宮第一次大極殿から大峯山はどのように見えているのだろうか。

図4がカシミール3Dのカシバード機能による平城宮第一次大極殿からの眺望である。レンズ三五mmの図4上では山上ヶ岳がかすかであるがピークが見てとれる。図4下はレンズ一三五mmでズームアップしたものであるが、先の計算通り、前山よりも上に全体の約十分の一が見えており、頂上付近の山容が十分に認識できる。また四寸岩山から大天井ヶ岳さらには弥山、八経ヶ岳まで主だった大峯南部の諸峰が見えている。

図5はカシミール3Dによる可視マップである。中心を山上ヶ岳とし、半径六〇km圏内で山上ヶ岳を見ることのできる地点を色分けして、奈良

盆地を主に表示した。奈良盆地内では、明日香村から桜井市、天理市にかけての東南部を除き、大半の地点から山上ヶ岳を見ることができ。特に奈良盆地北半では、西は矢田丘陵と西の京丘陵、北は平城山丘陵、東は国道一六九号線を界限として広く可視域となっている。

ただし、これは先にも触れたように視点とした平城宮第一次大極殿の周囲に遮蔽物が無く、ほぼ水平に近い角度で南側を遠望できる条件下による。第一次大極殿院内に限れば、次のように検証が可能である。

遮蔽物の候補としては、築地回廊、南門、楼閣等の区画施設がある。A―Bはその方向角一五度七分三三秒からすれば、第一次大極殿院では南門中心より約六〇m東の南面築地回廊上を通る。地形の勾配や復原建物

目 次

平城宮から大峯山は見えるか(下)
平成三〇年度韓国研修記
橿原考古学研究所 研修略記
附属博物館関連展示案内

ト 部 行 弘
郭 越 陽 平
岩 家 龍
編 集 部
8 6 3 1

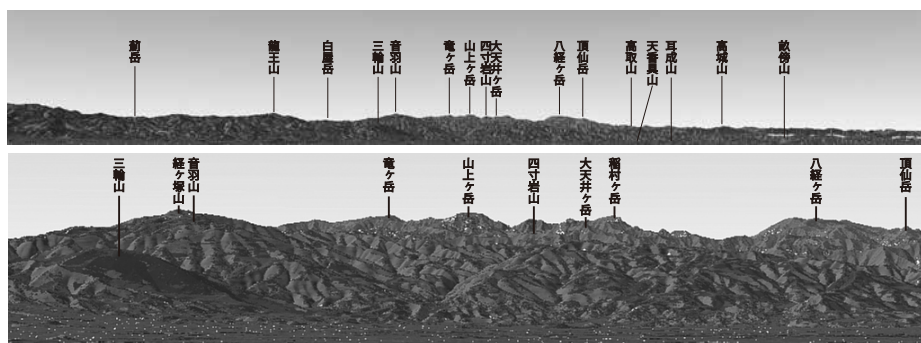


図4 カシバードによる平城宮大極殿から大峯山方面の眺望
(上：35mmレンズ、下：135mmレンズともに一部改変)



図5 奈良盆地における山上ヶ岳の可視マップ
(ベースは地理院地図、一部改変)

の寸法等、設定条件に不確定さが伴うが、南面築地回廊についてGL六七・六m、基壇高〇・八m、復原高二五尺(七・四m)とすれば、その天端は標高七五・八mとなり、第一次大極殿基壇上面標高七六・四mよりも低い。従って諸条件の設定を第一次大極殿院内に、かつ東楼が増築されるおよそ天平三(七三一)年以前に限れば視通は可能である。

四、まとめ

検証の結果、平城宮から大峯山は

条件付きではあるが見えることが明らかとなった。

奈良盆地から大峯山の眺望についての成否に触れた文献は管見では極めて少なく、むしろ不問に付されていた観がある。これは実査による大峯山からの眺望を記した江戸時代の文献からも窺える。例えば弘化四（一八四七）年の畔田伴存『和州吉野郡群山記』⁽⁸⁾では鐘掛岩から西北の眺めとして「山々重疊したる遙かむかふに、和州二子山見ゆる。また打越して、武庫山もみゆる様に寛ゆ」と記し、北方への言及は無い。また、享保一四（一七二九）年の植村政勝『諸州採葉記』⁽⁹⁾では、同じく鐘掛岩からの眺めとして「右之上分東ノ方ニ伊勢見ル、西ノ方淡路国・土佐国見ル、南ノ方紀州熊野見ル、北ノ方播州・摂州見ル」と記し、北方は奈良・山城方面ではなく実際には北西方にあたる播磨・摂津としている。実際の北方への目視では図1の通り、視角の中では前山が大部分を占め、平城山丘陵までの奈良盆地北半は狭い幅の中に圧縮されており、ランドマークになるようなものが無いと認識しづらい。前山が無く視界が開けている北西方へ自然と目が向いてしまい、北方は見えないものと処理されているのであろう。役行者による葛城・金峯山間の架橋譚もスケールは別として視覚的にはうなずけるほどである。いきおい、奈良盆地から大峯山の眺望も不可能と判断されてきたと思える。

それでは平城宮から大峯山への可視が判明して、菅谷氏の山中他界批判は否定されるのであろうか。実はそうとも言えない。そもそも山中他界の山中とは「無難に一生を経過した人々の行き処は、（中略）且つ具体的にあのあたりと、大よそ望み見られるような場所でなければならぬ。」⁽¹⁰⁾として提唱されたものであった。字句通りに解釈すれば、山中他界は生者が祖霊をまつり、祖霊が生者を守護できるように普段において双方が視認し合える近くの場所にあることになる。一方で、吉野から熊野にかけての大峯には、「それぞれの地域に民間信仰・仏教・道教など種々の宗教によって色づけられた他界観が重層している」と指摘されるようにきわめて複雑な様相を呈している。残念ながらこれ以上の言及は筆者の手に負えるところではない。

考古学の面から大峯山の奈良時代開山を明らかにされた菅谷氏が、大峯山頂に信仰の生じた原因を自問したときに、「わからないと言わざるをえない」とした言葉の重さと深さを今更ながらに思うのである。

註

(1) 拙稿二〇〇五「學峯講究会式の記」『山の考古学通信』No.一七 山の考古学研究会

(2) 個別の山峰名を指す場合を除き、小文で言う「大峯山」は山上ヶ岳。「大峯」は熊野から吉野までの山岳地帯を指す。また、その表記は「大峯山」「大峯」で統一する。

(3) 菅谷文則一九九七「山中他界の検討」(研究発表「第一〇回山の考古学研究会 吉野山大会」)。なお、この発表内容は成文化されていないが、以下の文献に断片的ではあるが論旨が述べられている。菅谷文則一九八五「大峯信仰への考古学的アプローチ」『吉野地域における文化的価値の再点検と振興のための調査―昭和五九年度報告書―』(財)環境文化研究所、菅谷文則二〇一一「大峯山山上ヶ岳の調査と初期の修験―(講演録)『古来大峯の謎Ⅱ』奥吉野研究会

(4) 平城宮第一次大極殿の復元寸法は、次の文献よりG.L七三・〇m、基壇高一・五尺(三・三三九七m)とした。奈良文化財研究所二〇〇九「平城宮第一次大極殿の復元に関する研究Ⅰ 基壇・礎石」奈良

(5) 文化財研究所学報第七九冊使用したカシミール3Dは、⁽¹¹⁾OSGで、国土地理院が提供する基盤地図情報の標高データを読み込んだ。カシバードの設定は、視点の位置を表1の平城宮第一次大極殿とし、標高七六・四m、対地高度一・五m、仰角〇度とした。

(6) 必ずしも数値が明記されていないため、次の文献に掲載された図表から各数値を読み取った。奈良国立文化財研究所一九八二「平城宮発掘調査報告XI」奈良国立文化財研究所学報第四〇冊、奈良文化財研究所二〇一一「平城宮発掘調査報告XVII」奈良文化財研究所学報第八四冊

(7) 次の文献には、弥山は奈良盆地の平野部から観察が可能とするが、同じ著者による「山上ヶ岳」の項では触れられていない。森沢義信二〇〇五「弥山八経ヶ岳」『山上ヶ岳』『新日本山岳誌』日本山岳会ナカニシヤ出版

(8) 大阪歴史博物館蔵。御勢久右衛門編著一九九八「和州吉野郡群山記―その踏査路と生物相―」東海大学出版会

(9) 国立国会図書館蔵。奈良県農業連合会一九八八―一九九一「奈良県農業史」資料編

(10) 柳田國男一九四六「先祖の話」筑摩書房(『定本 柳田國男集』第一

○巻 筑摩書房に所収)

(11) 宮家準一九八二「修験道の他界観」

『東アジアにおける民俗と宗教』

吉川弘文館

(12) 菅谷文則一九八七「山岳信仰の根

源」『日本の古代』第一〇巻 山人

の生業 中央公論社

挿図の調整について渡部弘美氏の手を煩わしました。記して感謝申し上げます。

平成三〇年度韓国研修記

岩越陽平

一、はじめに

平成一六年度以来、樞原考古学研究所と韓国国立文化財研究所との間で交換研修事業が実施されているが、平成三〇年度は私が韓国への派遣の機会を頂くことになった。研修期間は、平成三十一年一月九日から三月一九日までの七〇日間である。

この研修における私の目的は主に次の三点であった。①韓国国立文化財研究所の調査研究活動について学ぶとともに、文化財研究所員との交流を深めること、②韓国の歴史全般や通時代的な日韓交流史について理解を深めること、そして、③今回の研修における研究テーマとして設定した「日本の古墳時代須恵器と韓国三国時代の土器の比較研究」である。

追記 前稿「平城宮から大峯山は見えるか」(上)発表後、小澤毅氏から図3の断面図に球差と気差が反映されていない不備の指摘があった。小澤氏の計算によれば沈み込み量(両差=球差-気差)は一七四m、A-Bの仰角は一度三七分四八秒となり、視通は可能である。ご指摘いただいた小澤氏に感謝いたします。

今回の研修は、韓国考古学への関心を持ちながらもなかなか行動に移せていなかった無精な私にとって、本格的に韓国考古学への一歩を踏み出すための千載一遇の機会であった。

また、若輩者の私に奈良県・研究所からこのような機会を与えられたことは、またとない幸いであった。

二、研修について

この研修以前に、私は個人旅行や研究会への参加などで、韓国を五回訪れたことがあったので、韓国の雰囲気自体にはある程度慣れていたが長期の滞在となると当然ながら勝手が異なる部分もあった。特に不安だったのは、韓国でお世話になる文化財研究所にちゃんと馴染めるかという

こと、また、短い期間の中で韓国の資料を用いた研究成果を何らかの形でできるかという点であった。

それ以外のことは特段心配もしていなかったが、自分でもやや予想外なことに、食の面で若干の苦勞があった。子供の頃から、食については食わず嫌いをしないというのが取り柄でもあったが、韓国では当たり前のように食卓に並ぶ甘辛い調味料であるコチュジャンが自分の舌と微妙に合わないことに気づくと、日本食への恋しさが徐々に募っていった。

気候や環境について感じたことにも少し触れておきたい。大陸に近い韓国では日本よりもPM二・五による大気汚染がかなり深刻化しているようで、天気予報と合わせてPM二・五の量を毎日確認することが習慣化しているという人も多くみられた。

PM二・五は韓国でミセモンジ(微細ホコリ)と呼ばれるが、ミセモンジについての話題は「今日は良い天気ですね。」と天気の話をするのと同じぐらい挨拶代わりの話として触れられることが多かった。

もう一つは暖冬化である。大雑把に言えば日本の東北地方と同じくらいの緯度にあり、大陸の寒気が直接流れ込む韓国では、冬場は相当に冷

え込むということを事前情報として多くの人から聞いていた。が、体感では奈良県とそれほど差がなく、降雪を経験したのも、私が全羅南道羅州市に滞在していた平成三十一年一月三一日のみであった。近い国なので当たり前でもあるが、日本と同様な暖冬化の影響を韓国でも感じた。

次に、語学については、研修以前から半分は研究のため、もう半分は趣味として韓国語学習を行っており、この研修を通じてネイティブの韓国語に触れることで、更なるレベルアップを図りたいと密かに目論んでいた。実際、韓国語学習のおかげで、韓国での生活自体にはそれほど戸惑うことなく適応できたように思う。さらに、日常会話を多少はこなせたおかげで、日本語をあまり話さない方とも交流がもてたことは、勉強の甲斐が大いにあったといえるだろう。ただ、語学の不才な私が韓国語能力を十分に向上させるには、少し時間が足りなかったようで、会話も流暢というには程遠く、韓国語論文も期待していたほど読みこなすことはできなかった。日本に帰国してから既に一年が経ったが、現在も韓国語能力をなんとか維持・向上している。

さて、研修内容について、今回の研修で幸いだったのは韓国の各地方に置かれている文化財研究所を数日から数週間程度のスパンで転々としながら、それぞれの地域の遺跡や博物館、考古資料などを見て回ることでできた点である。これまでの職員が派遣された過去の研修では、大田広域市にある韓国国立文化財研究所を中心に、どこか一箇所の研究所に継続的に滞在するというのが基本的なパターンだと聞いていたので意外ではあったが、おかげで多くの方々と交流がもてたし、地域の風土や考古資料の地域性を知るのにも助かった。ただその分、文化財研究所の方々には私の出張や生活などの管理の面でお手数をお掛けした。

最初の滞在先となったのは、忠清北道忠州市にある中原文化財研究所（二月一日～二月二十五日）である。ここでは、研究テーマに関連する論文や報告書などの探索を中心に、い、その後の研修活動のための環境を整えることができた。また、中原文化財研究所が行っている製鉄関連遺跡の調査や、鉄生産に関する実験考古学的研究など、特色ある調査研究活動について、最近の状況を伺うことができた。

この中原文化財研究所を含め、韓国で出会った方々はみな私のことを暖かく歓迎して下さったが、驚いたことに、自分ご家族と一緒に迎えて下さることが度々あった。このような家族ぐるみの付き合いへの抵抗の無さは、少なくとも私の世代の日本人にはあまり見られないホスピタリティといえるかもしれない。また、就職するまでに軍隊制度などもある韓国では、当時二六歳の私よりも年下の職員自体が極めて稀であったにも関わらず、若輩者の私に真摯に向き合って下さったことには感謝の念に堪えない。ところで、残念なことに、中原文化財研究所でお世話になった鄭太根さんという方がいら



写真1 咸平竹岩里古墳見学
(2019年1月30日)

したが、私の帰国後、持病の急な悪化により亡くなられたということがある。この場をお借りしてご冥福をお祈りしたい。何かと移動が多かった私を、車で忠州から大田まで送り届けて下さり、車内で私の拙い韓国語に耳を傾けて下さったことや、日本の音楽をよく聞いていると仰っていたことが思い出される。

次の滞在先となった、全羅南道羅州市に所在する羅州文化財研究所（二月二日～二月三日）では、全羅南道の地域で確認されている前方後円形の古墳の現地踏査や、古墳から出土した須恵器・須恵器系土器の調査など、近年注目されている日韓の交流関係を示す資料を調査した。また、韓国の土器生産遺跡の資料として、羅州五良洞窯址や羅州新道里唐加窯址の出土土器の調査を行うことができた。

韓国でソルラルと呼ばれる旧正月期間にはほとんどの博物館や百貨店などのお店も閉まってしまいうので、それまでの見学資料の整理や韓国語の学習を行ってゆつくり過ごした後、続いて慶尚南道昌原市にある伽耶文化財研究所に滞在した（二月一日～二月十五日）。滞在中は、三国時代の加耶地域に存在していた、金官

加耶、阿羅加耶、大加耶、小加耶など、いくつかの政体ごとの代表的な古墳群の踏査と博物館を案内して頂くとともに、それぞれの地域の出土土器を見学させて頂いた。加耶地域ではそれぞれの政体ごとに作られた土器の意匠や形に違いがみられるが、その違いや各地域の土器編年について理解を深めることができたのは、研究に大いに役立った。また、伽耶文化財研究所滞在中は、金海市鳳凰洞遺跡、咸安郡末伊山古墳群、昌寧郡校洞・松峴洞古墳群など、いくつかの発掘調査現場を見学させて頂いたが、末伊山古墳群一三号墳の調査は、五世紀中頃に築造された古墳の石室の蓋石に、南斗六星などの星座を表現した窪みが発見されたとして有名になり、日本でもインターネットのニュースなどに取り上げられていたようである。

最後の滞在先となったのは、大田広域市の文化財研究所である（二月二〇日～三月九日）。それまでの研修では本当に色々な地域の資料を見学させて頂いたが、悪く言えば広く浅くになってしまっていたということもあり、得られた知見を研究として昇華させる必要があった。そこで大田滞在中は、研修中に調査した

資料の整理やさらなる資料収集に、気合を入れ直して臨んだ。そして、研修の最終日の前日には締め括りとなる研究発表を無事に行うことができた。

大田滞在中は、他と同じように遺跡や博物館を案内して頂いたり、国立文化財研究所の調査研究活動について、様々なことを教えて頂いたが、なかでもGIS（地理情報システム）を用いて全国的に整備された遺跡地図を見せて頂いた時には、過去の発掘調査の範囲なども一目で確認できるように進歩した遺跡地図のシステムに驚かされた。また、調査技術の交流の一つとして、文化財研究所の若手職員達とともにドローンを利用した空中写真の撮影方法について講



写真2 陶質土器資料調査風景
(2019年2月11日国立金海博物館にて)

習があり、いずれ自分も近い将来、奈良県の発掘調査の中でドローンを扱う時が来るかもしれないと思いつながら講習に参加した。なお、余談ではあるが、大田の文化財研究所の若手職員は漫画・アニメを中心とした日本文化にも興味津々で、昼食時にはそのような話で盛り上がった。

研修では、以上の研究所のほかに、慶州文化財研究所や江華文化財研究所の方にも、遺跡踏査や資料見学でお世話になった。また、二月後半の数日間は、檀原考古学研究所の共同研究員の木下亘さんと共に、忠清道・全羅道の遺跡踏査・資料調査を行った。私と木下さんが職場で重なっていたのは、木下さんが附属博物館副館長を勤められていた最後の一年間だけであったが、木下さんが長年研究されてきた須恵器・陶質土器の研究分野をはじめ、韓国のことを様々に教わることでできて、たいへん貴重な経験となった。

三、研究について

帰国の前日である三月一八日には、一時間程度の時間を頂き、「六世紀を中心とした須恵器と陶質土器の影響関係の研究」と題して、研修成果を発表した。

須恵器は、窖窯を用いた高火度焼成によって生産された保水性や耐水性に優れた硬質の土器であり、西暦四〇〇年前後とされる日本での須恵器生産の開始にあたっては、加耶地域や全羅道の地域などからの工人の渡来を含む、韓国からの直接的な影響が想定されている。須恵器生産は「渡来人の時代」とも形容される五世紀に、韓国から伝わってきた最新技術の一つであり、このような須恵器生産の伝来期に関する研究は、当時の韓国と日本の交流関係の解明にもつながる重要なテーマとして研究されてきた。

一方で、須恵器生産技術の伝来以降は日本で須恵器の生産が定着するにつれて、徐々に日本化された形態や器種構成に変化していくと考えられており、韓国との関係よりも国内での生産や流通に着目した研究に相対的に比重が置かれてきた。私は学生時代から須恵器の研究を継続して行っているが、これまでに研究してきたのも主に日本国内での須恵器の生産や流通に関することであった。

しかし近年では、六世紀以降になっても、韓国と日本の間で共通する器種が出現したり、形の変化が類似するといった現象が指摘され、須恵器



写真3 韓国の子持土器展示見学
(2019年3月3日 国立大邱博物館にて)

と韓国の陶質土器の相互影響を認める資料状況になってきている。また、そういった現象が、日本と韓国の交流が深まる時期や、日本の国家体制に変化がみられる時期に起きているということが重要である。私はこのような須恵器の変化にみられる韓国からの影響の有無や系譜、歴史的背景を明らかにしていきたいと、その研究に力を入れている。

そして、その評価を正しく行うためには、韓国にある類似資料を集めし、地域性や時期などを詳細に検討していく必要があると感じており、現在もその作業を継続して進めている。今回の研修中には、日本の装飾付須恵器に類似する陶質土器の「子持土器」を集成し、その分類や地域性の検討を行った。なお、この成果

の一部については、今回の研修に際して助成を賜った、公益財団法人由良大和古代文化研究協会の『研究紀要』に掲載していただいた。

四、おわりに

私が韓国を訪問した頃、日本の植民地支配に端を発する慰安婦問題・徴用工の問題や、平成三〇年一二月二〇日に発生した能登半島沖でのレーダー照射事件により、私たちがメディアを通じて知る日韓関係には暗い影が落ち始めていた。そのような世間の雰囲気によそに、研修中に韓国で出会った人々との関係は終始和やかなものであり、このような実体験は、日韓の友好関係が今は確かなものであるかのように私に感じさせることもあった。一方で、印象に残っている

橿原考古学研究所

寧夏文物考古研究所

郭 家 龍

一、はじめに

二〇一六年に寧夏文物考古研究所は私の日本での研修派遣を計画しましたが、妻が妊娠していたため、実施できませんでした。しかし、二〇一九年九月、ついに日本での研修に踏み出すことになりました。今回の

研修略記

の出来事がある。韓国滞在中にお世話になったある韓国人・日本人夫妻がその子供たちとともに私を食事に連れ出してくれた際、韓国人と日本人の子供として生まれたこの子供たちが将来大人になった時に、日本のことをどう思うようになっていくのだろうかと憂いを帯びた声で語られた様子には、日本と韓国の間に今なお確かに存在するわだかまりを感じるとともに、これからの両国間関係の進展を願わずにはいられなかった。今回の研修でお世話になった方ばかりにも多く、取えて特定の御名前を上げることができなかったが、文化財研究所の職員の方々をはじめとする韓国で出会った皆様、また私を日本から送り出してくれた皆様にも改めてお礼を申し上げておきたい。

研修目的は、日本考古学の発掘と文化財の管理・保護に関する理念を知ること、日本の旧石器考古学の資料収集を行うこと、そして日本語を勉強することでした。

橿原考古学研究所での研修期間は、二〇一九年九月一七日～二〇二〇年

七月一七日までの予定でした。しかしながら、全世界で猛威を振るう「新型コロナウイルス」により、帰国する飛行機が制限されるという影響があり、最終的に私は二〇二〇年六月二日に急遽中国へ帰国することになりました。研修期間は八ヶ月半と、当初の予定期間よりも短くなってしまいました。ですが、豊かな研修生活は私にとって大変有益なものとなりました。日本での研修期間の主な活動は以下の通りです。

二、研修活動

①考古学の発掘現場の見学

毎月第三金曜日に行われた「現地検討会」では、橿原考古学研究所、奈良文化財研究所、市町村などが実施する発掘現場を見学しました。研修期間中、八回の現地検討会に参加しました。毎回、参観前に当日の見学場所と駐車場所が記載された地図が配られ、長靴を履き、ヘルメットを持って参加しました。ヘルメットには、調査員本人の名前と血液型が記載されていました。

見学できたのは、a 橿原市四条遺跡、橿原市藤原京跡、奈良市平城京跡、b 河合町宮堂・長楽遺跡、奈良市東大寺東塔院跡、奈良市興福寺跡。

c 橿原市藤原京跡、奈良市富雄丸山古墳、天理市樺本町中ツ道、奈良市平城京跡。d 御所市中西遺跡。e 大和郡山市平城京西市跡。f 河合町宮堂遺跡、王寺町西安寺跡。g 御所市新村・柳原遺跡、橿原市土橋遺跡、橿原市小槻遺跡、大和郡山市平城京西市跡。h 天理市ヒエ塚古墳、天理市東乗鞍古墳、奈良市赤田横穴群です。これらの発掘調査現場の視察を通じて、考古学における地層学や類型学などの利用方法が日中で同じ方向性であることを理解しました。また、発掘調査の方法についても大変参考になりました。

②博物館と遺跡公園の見学

中国には、『私は家におらず、博物館へ向かう道中にある』という書名の本があります。橋本裕行さん、



写真1 奈良市赤田横穴墓群にて
右：郭家龍氏

鈴木裕明さん、東影悠さんや他の職員の方々が、研修の手配をして下さり、三八ヶ所の博物館を参観することができました。

主なものは次の通りです。京都大学人文科学研究所、京都大学総合博物館、泉屋博物館、大阪府立狭山池博物館、和泉市久保惣記念美術館、大阪歴史博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、大阪府立東洋陶磁美術館、大阪府立弥生文化博物館、兵庫県立考古博物館、神戸市立博物館、九州国立博物館、九州歴史資料館、福岡市博物館、かみつけの里博物館、国立歴史民俗博物館、明治大学博物館、江戸東京博物館、奈良国立博物館、葛城市歴史博物館、飛鳥資料館、天



写真2 吉野ヶ里遺跡にて 右 郭家龍氏、左 孫戦偉氏

理大学附属天理参考館。

私は、寧夏文物考古研究所で主に旧石器時代の発掘と研究に従事しており、日本の旧石器考古学にも極めて高い関心がありました。そこで、二上山博物館、群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬県立歴史博物館、岩宿博物館、福井県立恐竜博物館、福井県立年縞博物館、若狭三方縄文博物館など、旧石器時代に関連する見学内容を増やしていただきました。それ以外にも平城宮跡歴史公園、黒塚古墳、唐古・鍵遺跡公園、高松塚古墳、馬見丘陵公園、吉野ヶ里歴史公園、大阪城天守閣等、遺跡を保存した遺跡公園の見学を行いました。

③ 研究会と講座

「現地検討会」の終了後には「談話会」がありました。これは研究所の研究員が個人研究を発表する小規模な研究会でした。主なものに「中央アジアの調査成果と奈良の遺跡」「後漢代石刻斗棋における舌の表現について」「前漢時代における金製品の開発に関する分析」などがありました。また、考古学の一般への普及啓発を目的とした講演会があり、奈良県南東部の考古学・美術・民俗「出雲の青銅器祭祀から大和の前方後円墳祭祀へ」等が開催されていました。

三、研修成果

① 保護理念の普及と展示

研修期間中、私が最も学習し参考にするべきと感じたのは、考古学的発掘調査と博物館の展示利用に關してです。すなわち、発掘調査の一般への公開を通して、あるいは各種博物館との連携、特に専門的博物館の展示との連携によって、考古学と文化財に關する知識を一般へ普及させている点です。発掘調査現場は、一般人でも見学することができ、発掘調査の内容を一般にも理解できるようになっています。室内での整理作業も、ガラス窓越しに遺物の洗浄、修復、ネーミング、実測図作成、写真撮影、報告書作成といった一連の工程を公開している機関もありました。年末には一般に向けて発掘調査の成果を展示していました。こうした調査の最初から最後まで過程を見せることで、考古学が古代の人々の科学、技術、芸術、教育、精神生活などを追究する学問であることを一般へ理解させていました。この理念は、中国が近年提唱した「文化財の活用」と図らずも一致していますが、明らかに日本はこの分野ですでに豊富な経験を持していました。

多くの博物館を見学する中で、ほとん

どと全ての博物館に発掘調査に關する展示があり、発掘調査の業務内容のみならず、考古学的調査・研究の発展の歴史をも理解させるようになっていました。これは、考古学そのものが歴史であり、博物館に残す必要があるからでした。国立の総合博物館以外での、博物館の展示利用の専門化も豊富で多彩なものでした。例えば、兵庫県立考古博物館は考古学に特化した博物館です。年縞博物館は、泥の層をもちいた（七万年分の）考古学的年代測定のものさしを展示した博物館です。岩宿博物館は、遺跡を保護・活用した博物館です。大阪府立狭山池博物館は、発掘後に計画された水利博物館であり、巨大な堰の断面をほぎ取って完全に保護するため、博物館完成まで十数年を要しました。

ここ数年、中国も日本と同様に、社会一般に考古学の知識と理念を普及させ、伝えるようになりつつあります。現在、「国際博物館の日」、「文化と自然遺産の日」の期間には各種活動が行われ、考古博物館、専門的博物館、遺跡公園などの建設が大いに推奨されています。

② 考古資料の保存とデジタル化
檀原考古学研究所やその他の考古学

に関する職場の見学では、資料収蔵庫と考古資料の管理が大変印象に残りました。収蔵庫内には複数段の収蔵棚があり、異なる出土地ごとに遺物に番号が付けて置かれていました。これら遺物の管理は全て情報システムによって統合され、いつでも通し番号を通じて、その情報を知り、所蔵位置を定めていました。収蔵庫には、発掘調査の写真や各種図面と、遺物の整理が終わって発掘調査報告書が刊行された遺跡の各種資料が棚に整然と並べて保存されていました。これら資料と資料収蔵庫のシステムの統合され、考古資料の保管のデジタル化がなされていました。デジタル化により利便性が高まった背景には、多くの作業人員の複雑で長い年月をかけた勤勉な仕事があります。その職業精神には感嘆せざるを得ず、同時に私の今後の業務に参考となる経験となりました。

③学術交流

研修期間中、何回かの「談話会」と考古学講座に参加しました。言葉の壁のため、講座を聞いた効果は完全には満足のいくものではありませんでしたが、講座後に補習をするのと、私にとっては有益なものとなりました。京都大学人文科学研究所

の岡村秀典さんと学術交流する機会を川上洋一さんが準備してくださり、鳩子山遺跡の発掘調査について発表を行いました。その後、橿原考古学研究所でも同じく鳩子山遺跡についての発表を予定していましたが、新型コロナウイルスの影響で何度も延期となり、最終的に帰国を早めたため発表することができませんでした。兵庫県立考古学博物館と岩宿博物館の参観時には、発掘調査の過程と日本 の旧石器時代史に関して直接意見交換を行うことができ、大変有益なものとなりました。

四、研修の感想

日本での研修が四ヶ月を過ぎた頃、中国で「新型コロナウイルス」が発生し、医療物資が不足する状況になりましたが、日本は積極的に援助の手を差し出し、「山川異域、風月同天」などの詩句で激励と支持を言い表しました。同様に、私の研修期間中、企画課の方々が忙しい業務の合間を縫って、生活と学習に関する様々な手配をして下さいました。調査課と資料課の方々からは、資料調査に関して多くの手助けをいただきました。各博物館と考古学関係機関の見学時

を丁寧に案内して下さい、発掘調査現場では各工程について理解することができ、書籍も贈呈いただきました。この他、研究所では年に一度の月見の会、忘年会、新年会など伝統的な日本文化を体験することができました。毎週火曜日の夜には、木村理恵さん・内藤元太さんと一緒に日本語・中国語の相互学習をおこない、研修期間中の楽しいひとときとなりました。米川裕治さんは、新型コロナウイルスが深刻となった際にマスクを贈って下さいました。お菓子が突然机の上に置いてあることもありました。研修期間の全てにおいて日本の友人の温かさを感じることができました。

以上、日本での研修は私の人生にとって美しい思い出となりました。日本で知った考古学の現状と方法を、中国の考古学と比較することは、私にとって重要な啓発となりました。日本の同業者の仕事上の業務を敬う精神と真剣な態度によって、私は日本と日本人をさらに深く感じることでできました。とりわけ新型コロナウイルス発生時には、日中両国民の友好を目の当たりにすることになりました。

橿原考古学研究所が今回研修する

機会を与えてくださったことに感謝するとともに、私の研修にご尽力いただいた全ての研究所の皆さんに感謝します。中国寧夏回族自治区銀川に皆さんが越しになることをお待ちしております。

附属博物館関連展示案内

◎附属博物館巡回特別展

『しきしまの大和へ』

—奈良大発掘—

主催…附属博物館・九州国立博物館
開催期間…令和二年七月二十八日(火)～二月二〇日(日)

開催場所…九州国立博物館

◎県内市町村との共同企画展

『五條の古墳を掘る』

—附属博物館収蔵品里帰り展—

主催…附属博物館・市立五條文化博物館
開催期間…令和二年一〇月一七日(土)～二月二三日(日)
開催場所…市立五條文化博物館